

自閉症児の
コミュニケーション支援
—理解し合うために—

自閉症児のコミュニケーション支援の 現状と課題

京都市児童福祉センター児童精神科医師 門 眞一郎

はじめに

五年前の平成一九年四月一日に出された、文部科学省初等中等教育局長通知「特別支援教育の推進について」によると、『特別支援教育』とは、「共生社会」を目指し、子どもの「自立」と「主体的取組」を支援するために、「一人一人の教育的ニーズ」を把握して、「持てる力を高め」、「困難を改善又は克服」するために、「適切な指導及び必要な支援」を行う教育である。

もう少し具体性を持たせると、次のように言えるのではないか。「共生社会」を目指すためには、コミュニケーションが重要課題となる。しかも「自立」と「主体的取組」を支援するためには、『自

発的』なコミュニケーション・スキルが重要課題となる。さらに「一人一人の教育的ニーズ」を把握して、「持てる力を高める」ためには、発語スキルが乏しくても、持てるコミュニケーション・スキルを伸ばすことが優先課題となり、コミュニケーション障害に起因することの多い様々な「困難を改善又は克服」するためには、コミュニケーション・スキルの獲得についての「適切な指導及び必要な支援」が重要な教育課題となる。要するに、コミュニケーション支援は、自閉症児への支援においては最重要課題となる。

一 コミュニケーション支援

コミュニケーション行動は、双方向性の行為である。第一に、自閉症児が受容する、すなわち理解するという行為があり、第二に、自閉症児から表現し伝達するという行為がある。その双方向性の行為がともに、自閉症児の認知特性によって大きな影響を受ける。しかしその認知特性を、『障害』や『症状』といった否定的・病的なものと考えるのではなく、発達に『メリハリ』があることとして考えたい（定型発達はメリハリのない発達）。つまり、メリ（減り）とハリ（張り）の相対的な差が大きいことが、コミュニケーションに大きな影響を及ぼしていることを問題にしたい。そして最も重要なメリハリは、「聴覚情報処理よりも視覚情報処理の方が相対的に強い、すな

わち指示や説明・注意・叱責などは、口頭では伝わりにくいですが、視覚的な手がかりを与えれば伝わりやすい」ということである。それゆえ自閉症児への支援においては、メリをハリで補償することが基本方針となる。

1 理解に関しては構造(明確)化

理解コミュニケーションのスキルを伸ばすためには、構造化が中心的な技法となる。ここで言う《構造》とは、場面の意味と見通しのことであり、《構造化》とは、その場の状況に最も適切な意味と見通しとを明確に伝えることである。したがって構造化と言うよりは、構造明確化と言う方が正確であろう。自閉症児が捉えている構造(意味と見通し)は、周囲の人たちが捉えている構造とは、ずれることが往々にしてある。したがって、ずれている場合に、「この場面では、こういう構造として理解してほしい」ということを、自閉症児に伝えることが、理解コミュニケーションの支援ということになる。

構造を伝える際には、自閉症児の理解力のメリハリを考慮して、適切な配慮や工夫をする必要がある。とりわけ「聴覚情報処理よりも視覚情報処理の方が相対的に強い」というハリを活かすことが、

構造を伝える上で有効である。これが、視覚的構造(明確)化ということになる。

構造化による指導が効果的であることは、すでに一九七〇年代には英米で実証されており、それを体系的に発展させたのが米国ノースカロライナ州のTEACCHプログラムである。ただし、筆者の言う《視覚的構造化》はTEACCHプログラムで言う《視覚的構造化》とは少し意味が異なる。TEACCHプログラムでは、《視覚的構造化》は《構造化》全体の下に位置づけられている。しかし、TEACCHプログラムで言う《構造化》のほとんどすべてが《視覚的》なものなので、《視覚的構造化》の方を筆者は上位概念として使用している。

因みにTEACCHプログラムでは、《自閉症という文化》という考え方を発展させ、その特徴を一〇項目掲げている。その一番目が、「視覚的情報処理を相対的に好み得意とする」である。そして構造化された指導の原理として五項目掲げている。その三、四、五番目に、「物理的環境の構造化」、「一日の活動の流れを予測可能で理解可能なものにするために、視覚的に支援する」、「個々の課題を理解可能なものにするために、視覚

的に支援する」とある。

要するに、こちらから自閉症児に伝えたいメッセージの重要部分である《意味と見通し(構造)》を、具体的に視覚的なものにすることで、自閉症児の理解を支援するわけである。この点で、自閉症児への支援技法の多くが、視覚的構造化に他ならないことがわかる。たとえば、グレイの創始した《コミック会話》や《ソーシャル・ストーリーズ》、ベイカーの《ソーシャル・スキル・アルバム》など、ソーシャル・スキルを教える技法も、視覚的構造化に基づく理解コミュニケーション支援と考えられる。《教える》ということが、こちらからのコミュニケーションなのだから当然と言えば当然である。

2 表現に関しては代替・拡大コミュニケーション

次に、コミュニケーションのもう一つの側面、自閉症児から周囲の人に自分の意思を表現し伝えるスキルを伸ばすためには、やはり自閉症児の相対的視覚優位というハリを活かして、自分の意思を視覚的に表現できるように条件整備をする必要がある。つまり、音声言語だけに終始するのではなく、音声言語とは別の手段を使う、あるいは音声言語を補強する

ために別手段を援用することを考える。これが、代替・拡大コミュニケーション (alternative and augmentative communication; AAC) という考え方である。視覚的なAACを使うこと、しかもそれを自閉症児が自発的に使えるように教えることが重要である。

ここで注意しなければならないことがある。応答的なコミュニケーションばかり教えていくと、周囲からの働きかけや促しがないとコミュニケーション行動がとれなくなる、すなわちプロンプト依存になるという弊害を招く。その方が、教師の指示に従う扱いやすい子どもに育てることになるのかもしれないが、それは子どものニーズ(必要)に応じるのではなく、教師のデマンズ(要望)に応えるものでしかない。

3 自発的なコミュニケーション

絵カードを使うAACの場合でも、従来のコミュニケーション・トレーニングは、とかく応答の形で行われることが多い、その結果、プロンプト依存にしまいがちで、自発的なコミュニケーションを積極的に教えていくという点では不十分であった。また、トレーニングを開始するまでに前提スキル(例えば注目する、模倣するなどのスキル)がいくつつか

必要であり、その分トレーニング開始が遅れやすかった。しかし、それらの欠点を解決したのが、ボンディとフロストによるPECS (Picture Exchange Communication System) と略称される絵カード交換式コミュニケーション・システムである。

PECSでは、まず絵カードと要求対象アイテムとの《自発的》な交換を教える。指導者を二人用意することで、自発的な交換を最初から教えることができるようになった(一人は絵カードを取って相手に渡すのを手伝うプロンプター、もう一人は絵カードを受け取って要求対象アイテムを渡すコミュニケーション・パートナー)。強力な好子(強化子)と二人制プロンプトを用いることで、自発的な要求が失敗に終わることがなくなり、コミュニケーション意欲が低下しにくくなった(エラーレス・ラーニング)。トレーニングは六つのフェイズに分かれており、その進展段階に応じて他の重要なコミュニケーション・スキル(視覚的スケジュールの使用など)も教えていく。

PECSは従来のトレーニング法には見られない数々の特長を持っている。特に、最初から自発的なコミュニケーションを教えることができる、早くからそし

て障害が重くてもトレーニングを開始できる、子どもにとって機能的であるなどの点で優れている。

ICT (情報コミュニケーション技術) 機器の利用

理解コミュニケーションに関しては、パソコン画面や携帯端末画面に写真・絵・文字などを表示することにより支援することができる。また、動作のモデルを動画にして見せて理解を促すこともできる(PECSのトレーニングに、動画でのモデリングを取り入れて効果があったということも報告されている)。

表現コミュニケーションに関しては、従来より、VOCA (Voice Output Communication Aid: 音声出力型コミュニケーション装置) が、AACとして自閉症児にも使われてきたが、機器が比較的高価なことが普及の妨げになっている。しかし昨今のICT (情報コミュニケーション技術) 機器の進歩は、その点での突破口になりつつある。ゲーム機器や携帯電話に始まり、今やスマートフォンやタブレット型端末の普及に伴い、コミュニケーション支援のアプリケーション・ソフトウェア (apps) が次々に登場するに至っている(ボイスエイド^②、

VoiceIt[®]、ドロップトーク[®]、たすくコミュニケーション[®]、ねえ、きいて。[®]、など)。この分野は今や日進月歩の活況を呈している。

ただし、アプリケーション・ソフトは比較的安価であるが、端末機器は従来のVOC Aほどは高価ではないにしても、安価とは言えない。パニックを起こして物に当たったり、物を投げたりする自閉症児の場合、高価な機器を持たせることにはかなり勇気がいる。コミュニケーション・スキルが伸びるとパニックを起こさなくなることもよくあるが、それまでに機器が破壊されないという保証はない。

もう一つ難点がある。これらのVOC Aはコミュニケーションの相手に聴き取ってもらえないとコミュニケーションにはならない。周囲に誰もいないのに機器を操作しても、それは機器で独語しているに等しい。そばに人がいなければ探していくか、呼び寄せることができないかもしれない。その点、PECSでは、早いうちに(フェイズII)移動して人を探し、接近し、絵カードを手渡すという行動連鎖をシェイピングにより教えるので、対人意識、対人接近を身につけさせることができる。したがって、VOC Aを使う場合にも、その前にPECSのト

レーニングを積んでおけば、自発的に相手に確実にVOC Aでメッセージを伝えることができるようになる。PECS + VOC Aは強力な自発的コミュニケーション手段となる。

三 発語スキルとAAC

これまでの研究からPECSも含め、AACは発語スキルの発達を抑えないどころか、むしろその発達や上達を促すことが明らかになっている。そして、特にPECSの効果としては、五歳以下でPECSを一年以上使った子どものうち、五九%に自立的なことが発達し、PECSの使用をやめて、ことばだけでコミュニケーション可能となり、さらに三〇%では、PECSを使いながらことばを話すようになったことが報告されている。

やふじ

自閉症児への支援は、地域社会で、安全で快適に生活でき、必要な支援は自発的・主体的に要求でき、生活の質(QOL)ができるだけ高くなることを目指さなければならない。そのことと軌を一にして、文部科学省も、特別支援教育の目

標を、「共生社会」を目指して、子ども
の「自立」と「主体的取組」を支援することと明言しているのである。それを実行するためには、子ども一人ひとりの教育的ニーズをアセスメントして、発達のメリハリを踏まえた支援、特にコミュニケーションの視覚的支援が自閉症児への合理的配慮ということになる。

〈文献〉

- ・パトリシア・ハウリン(二〇〇二)「自閉症の心理治療と治療教育」『自閉症と発達障害研究の進歩』第5巻、一三〇〜一四九
- ・エリック・ショプラーら(一九九六)「TEACCHシステムにおける構造化された指導」『自閉症と発達障害研究の進歩』第1巻、二六九〜二八四
- ・アンディ・ボンデイラ(二〇〇四)「絵カード交換式コミュニケーション・システム」『自閉症と発達障害研究の進歩』第8巻、八二〜九四
- ・ロリ・フロストラ(二〇〇五)『絵カード交換式コミュニケーション・システム・マニュアル日本語版(第二版)』ピラミッド教育コンサルティングジャパン
- ・門真一郎(二〇一〇)「自閉症スペクトラムにみられる《視覚優位》」『精神科治療学』25、一六一〜一六二
- ・ノースカロライナ大学医学部TEACCH
H自閉症プログラム(ホームページ)
<http://teach.com/about-us-1/what-is-teach>
(2012/4/16現在)
- ・文部科学省(二〇〇七)『特別支援教育の推進について』
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nec/07050101.htm